

塩竈市文化財調査報告書第 10 集

塩竈市指定有形文化財（建造物）

勝 画 楼

調 査 報 告 書



令和 2 年 3 月

塩竈市教育委員会

序 文

塩竈は、国府多賀城の外港（国府津）として発展し、藩政期には、陸奥国一宮鹽竈神社の威光の下、仙台藩伊達家の手厚い庇護を受け、藩内有数の港として大いに栄えました。

鹽竈様が鎮座する一森山^{いちもりやま}の東端に、勝画楼があります。

かつては仙台藩の歴代藩主の御休所として使用され、明治天皇の東北巡幸では行在所^{あんざいしよ}となった勝画楼は、明治時代に民間に払い下げられ、料亭として親しまれてきました。

老朽化が進み、一時は解体が検討されましたが、勝画楼の保存を願う多くの皆様の声に後押しされ、平成 29 年 9 月、所有者である志波彦神社鹽竈神社様より塩竈市が建物を譲り受け、行政の手で勝画楼を保存していくことが決定しました。市では、勝画楼を後世に引き継ぐべき市民の共有財産として位置づけ、応急修繕工事を行うとともに、市の有形文化財に指定しました。また、「勝画楼保存・活用検討委員会」を立ち上げ、有識者の先生方からのご助言を得ながら、将来的な復原や公開のあり方について検討を進めております。

本書は、平成 29 年度・同 30 年度に本市が実施した調査や、平成 30 年度に実施した応急修繕工事の内容を広く皆様に知っていただくことを目的に刊行するものです。

勝画楼についてはまだまだ未解明の部分が多く、今後も継続して調査研究を進めてまいり所存です。本書をご一読いただき、ぜひ忌憚のないご指導ご助言を賜れましたら幸甚です。

最後になりますが、貴重な文化財をご譲渡くださり、調査や工事に多大なるご助力を賜りました志波彦神社鹽竈神社の鍵三夫宮司様はじめ神社関係者の皆様、貴重なご助言を賜りました宮城学院女子大学の宮原育子先生、東北歴史博物館の小谷竜介先生、東北学院大学の齋藤善之先生、東北工業大学の大沼正寛先生、同じく中村琢巳先生、元仙台市博物館主幹兼学芸普及室長の菅野正道先生、鹽竈神社博物館の茂木裕樹先生、宮城県教育庁文化財課職員の皆様、株式会社伝統建築研究所の高橋直子先生はじめ職員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

令和 2 年 3 月

塩竈市教育委員会

教育長 高 橋 睦 磨

例 言

1. 本書は、平成 29 年度・同 30 年度に塩竈市が実施した建物調査について、その成果を広く一般に公開し、将来の活用に資するために発刊するものである。
2. 勝画楼は平成 29 年 9 月 8 日に志波彦神社鹽竈神社より塩竈市に無償譲渡され、平成 30 年 10 月 5 日に塩竈市有形文化財（建造物）に指定された。
3. 調査は、株式会社伝統建築研究所に委託し、東北工業大学の大沼正寛教授、中村琢巳講師の協力を得て実施した。
4. 本書は、株式会社伝統建築研究所から提出された以下の報告書をもとに、塩竈市教育委員会生涯学習課の白谷明彦、今野歩美が編集した。
 - (1) 大沼正寛・中村琢巳・株式会社伝統建築研究所『塩竈市旧法連寺勝画楼および広間（旧客殿御成ノ間）記録史料作成調査業務報告書』（塩竈市、平成 29 年 7 月）
 - (2) 株式会社伝統建築研究所『勝画楼詳細調査報告書』（塩竈市、平成 30 年 8 月）
5. 大沼教授と中村講師の同意を得て、平成 29 年度の報告書に掲載されている寄稿文を転載させていただいた。
6. 調査に当たり、鹽竈神社博物館の茂木裕樹学芸員から多くのご教示を賜るとともに、茂木氏が勝画楼に関する資料・記録類を集成した「勝画楼ならびに洗眸閣について（備忘）」を塩竈市教育委員会に提供いただいた。茂木氏の許可を得て、勝画楼保存・活用検討委員会での検討や追加調査の成果を踏まえた加筆修正を行い、本書に「勝画楼ならびに洗眸閣に関する記録類について」として収録させていただいた。
7. 勝画楼保存・活用プランの検討ならびに本書の編集にあたっては、勝画楼保存・活用検討委員会外部検討部会の宮城学院女子大学宮原育子教授、東北歴史博物館小谷竜介主任研究員、東北工業大学大沼正寛教授、志波彦神社鹽竈神社小野道教禰宜、東北学院大学齋藤善之教授、元仙台市博物館主幹兼学芸普及室長菅野正道氏から多大なご指導とご協力があった。
8. 資料の閲覧・撮影にあたっては、東北大学大学院工学研究科の野村俊一教授から特段のご高配を賜った。
9. 同じく、宮城県図書館、仙台市博物館、天理大学附属天理図書館の皆様からも多大なご協力をいただいた。
10. 掲載資料には、所蔵者・提供者名を付した。
11. 実測図は、特に断りのない限り株式会社伝統建築研究所が作成したものである。
12. 画像は、特に断りのない限り株式会社伝統建築研究所および塩竈市教育委員会が撮影したものである。
13. 図版 1 は、国土地理院発行の 1:25000「塩竈」（平成 9 年 3 月 27 日発行）を使用した。

目 次

序 文

例 言

目 次

勝画楼の意義と保存活用事業の留意点

勝画楼の文化財的価値について

調 査 報 告

I 調 査 概 要	7
1 平成 29 年度「旧法蓮寺勝画楼および広間（旧客殿御成ノ間）記録史料作成調査」	7
2 平成 30 年度「勝画楼詳細調査」	7
II 勝画楼について	8
III 調査成果	9
1 解 明 要 点	9
2 建物の現状について	9
3 勝 画 楼 棟	10
(1) 構造・間取り	10
(2) 勝画楼棟の建造年代考察	11
(3) 三ノ間（繋ぎの間）とその周辺	12
(4) 床組・基壇	13
(5) 外 壁	15
(6) 柱・天井・小屋組	15
(7) 建 具	16
(8) 縁 側	16
(9) 天保火災の影響に関する考察	18

4 広間棟	19
(1) 法蓮寺客殿（方丈）と広間棟との連続性	20
(2) 客殿の改変について～時期、要因、位置等～	22
(3) 明治以降の改修の痕跡	22
(4) ま と め	24
5 屋 根	26
6 玄 関	27
7 その他の箇所	28
(1) 4 畳半の書院	28
(2) 風呂場棟	28
(3) 水 回 り	29
(4) 三ノ間南側外縁の小部屋	29
8 南側アプローチ	29
9 建物変遷まとめ	29
10 平成 30 年度応急修繕工事の概要	31
(1) 工 事 概 要	31
(2) 主な修繕内容	31
図 版	37
勝画楼ならびに洗眸閣に関する記録類について	59
資 料	89
引用・参考文献	101

挿図目次

【図 1】 勝画楼全景	7	【図 36】 広間棟間取り	19
【図 2】 現況建物平面図	7	【図 37】 広間棟内部	20
【図 3】 南東方向からの空撮画像	8	【図 38】 18 畳間天井	20
【図 4】 勝画楼扁額	8	【図 39】 北東隅の隅木痕跡	20
【図 5】 勝画楼棟の小屋裏の状況	9	【図 40】 使用していない仕口跡	21
【図 6】 勝画楼棟の床下の状況	9	【図 41】 天井棹縁	21
【図 7】 勝画楼棟間取り	10	【図 42】 南側の小間	21
【図 8】 絵はがき	10	【図 43】 石段	21
【図 9】 箆欄間の伊達家家紋	10	【図 45】 建物と石垣の空間	22
【図 10】 一ノ間床板	11	【図 46】 仮設壁を撤去した南西面	23
【図 11】 二ノ間床板の墨書	11	【図 47】 同南面	23
【図 12】 「風土記御用書出」と現況の比較	11	【図 48】 同東面	23
【図 13】 【図 44】 「法蓮寺」図（部分）	12, 22	【図 49】 南西隅柱上部（桁跡）	23
【図 14】 三ノ間～水屋部分のようす	12	【図 50】 南面の天井切断痕	23
【図 15】 二ノ間西側の鴨居・箆欄間	13	【図 51】 天井切断痕（詳細）	23
【図 16】 釘隠	13	【図 52】 広間棟の床組	24
【図 17】 三ノ間の床の間	13	【図 53】 番付墨書「と廿一」	25
【図 18】 勝画楼棟の床組	14	【図 54】 番付墨書「へ拾四」	25
【図 19】 勝画楼棟縁側床下～段差の下地	14	【図 55】 応急修繕工事完了後の外観	26
【図 20】 基壇（切石積み）	14	【図 56】 「塩竈松島図屏風」図（部分）	26
【図 21】 基壇（玉石積み）	14	【図 57】 三ノ間の屋根（応急修繕工事後）	27
【図 22】 東側の基壇（玉石積み）	14	【図 58】 玄関（応急修繕工事前）	27
【図 23】 石積み・束柱修繕箇所	15	【図 59】 絵はがき	27
【図 24】 勝画楼棟北側外壁	15	【図 60】 移築された向拝	28
【図 25】 南側建具	15	【図 61】 「裏坂別当金光明山法蓮寺」図（部分）	28
【図 26】 勝画楼棟一ノ間の小組格天井	15	【図 62】 4 畳半の書院	28
【図 27】 勝画楼棟小屋裏	15	【図 63】 絵はがき	29
【図 28】 勝画楼棟小屋裏の番付墨書「はキ」	15	【図 64】 南側の階段跡	29
【図 29】 一ノ間の障子	16		
【図 30】 入側南面の障子	16		
【図 31】 縁側	16		
【図 32】 欄干	16		
【図 33】 取り外された欄干部	17		
【図 34】 『明治天皇聖蹟志』所収画像	17		
【図 35】 「塩竈市詳細図」図（部分）	17		

図番目次

第 1 図	既存平面図	37
第 2 図	西立面図	38
第 3 図	東立面図	38
第 4 図	南立面図	39
第 5 図	北立面図	39
第 6 図	断面図 1	40
第 7 図	断面図 2	41
第 8 図	天井伏図	42
第 9 図	既存礎石伏図	43
第 10 図	既存屋根伏図	44
第 11 図	展開図 1 (広間棟広間)	45
第 12 図	展開図 2 (勝画楼棟一ノ間)	46
第 13 図	展開図 3 (勝画楼棟二ノ間、三ノ間)	47
第 14 図	展開図 4 (勝画楼棟入側〔東側〕)	48
第 15 図	展開図 5 (勝画楼棟入側〔北側〕)	49
第 16 図	展開図 6 (広間棟奥の間〔広間北側〕)	50
第 17 図	展開図 7 (広間棟南部屋)	51
第 18 図	展開図 8 (縁側)	52
第 19 図	展開図 9 (廊下)	53
第 20 図	展開図 10 (玄関式台)	54
第 21 図	広間棟南側痕跡図	55
第 22 図	痕跡図	56

資料目次

地図 1	勝画楼位置図	89
資料 1	「旧修復帳」	90
資料 2	「新修復帳」(東北大本)	91
資料 3	「新修復帳」(県図書館本)	93
資料 4	「仙台所々神社絵図」	95
資料 5	「奥州名所圖會」	96
資料 6	「塩竈松島図屏風」	97
資料 7	明治 15 年の古写真	98
資料 8	明治初期の古写真	98
資料 9	昭和初期のパノラマ写真	99
資料 10	勝画楼実測平面図(『古建築』より)	100

勝画楼の意義と保存活用事業の留意点

中世、陸奥国一宮といわれた鹽竈神社とその関連資産群が鎮座する一森山は、眼下の門前町・塩竈海道と、国府津であった湊町および背後の干軒地区とともに、起伏と緑に富んだ独特なランドスケープを形成している。一般に、神仏習合のすすんだ我が国では、神社と寺院はしばしば渾然一体となっており、鹽竈神社も例外ではなかった。

慶応4年(1868)の「神仏分離令」に端を発したいわゆる廃仏毀釈は一森山にもおよび、明治4年(1871)、鹽竈神社別当法蓮寺は廃寺に至る。別当寺は、神社を管理するために置かれた寺であり、神仏習合の証左である。それゆえ、現在の青森から福島に至る広域を総称した陸奥国と、その第一の神社とされた鹽竈神社の由緒を考えると、別当法蓮寺の重要性は論を待たない。

金光明山 法蓮華院 法蓮寺(法蓮密寺)の縁起は、必ずしも定かでないが、寛文年間(1661-1673)頃には支配職としての地位を確立したとされている。伊達家の祈願寺、一宮別当として、伊達一門格の寺格に列しており、12房の脇院を従える勢力を得ている。すなわち一森山の東部には、これらの堂宇が丘陵部に並び立つ巨大な伽藍が形成されていたのである。

仙台藩主伊達家は、代々鹽竈神社を重要視し、改修造営を重ねてきた。とくに第5代吉村公(獅山)は、元禄16年(1703)に襲封、寛保3年(1743)自ら致仕するまでの40年間藩主の座にあり、しばしば松島、塩竈の地を訪れたと伝わる。このとき、別当法蓮寺の「方丈」と、これに増築したと思われる「勝画楼」を活用して参詣の拠点にしたと指摘されている。

安永3年(1774)塩竈村肝入の書出では、金光明山法蓮寺について、「一、客殿 南向竪十一間 横六間 一、書院 東向竪五間 横三間半」とあり、また「一、額 書院横額 勝畫楼三字 獅山様御筆」とある。ここでいう書院は「勝画楼」であり、獅山吉村公が「勝画楼」と名付け、自筆の扁額を掲げた。

こうして、特別の地に、特別に建てられた建造物は、時代を降って明治9年(1876)6月の明治天皇の東北巡幸の際、行在所となる。また、2年後には民間に売却され、さらに明治44年(1911)には料亭になり、増改築がなされた。戦後はふるわず、昭和36年(1961)に鹽竈神社に譲渡され、平成27年(2015)までは隣接する神社職員住宅の居住者らが維持管理を担っていたが、以後空き家となり、遺構周辺は無人状態となっていた。

権力者から庶民まで、この複合空間・鹽竈神社を様々なかたちで愛で、利用してきたことは明白であり、その歴史的意義もまた複合的である。市民協働で保存・活用を検討すべき、重要な遺構といえる。

なお、当遺構をめぐっては、東北大学の横山秀哉(1968)、佐藤巧(1992)らが実測調査等を重ねてきており、平成29年度・同30年度調査はこれに続く3度目の調査となる。今回は、これら先達の示唆をもとに、変容プロセスを確認・検証すべく詳細調査を行ったものである。株式会社伝統建築研究所・高橋直子らが調査を実施・統括し、歴史調査については主に中村琢巳と茂木裕樹が協力、実測と保存

活用方針等については主に大沼正寛が協力した。

調査概要および調査結果は後述の通りであり、遺構群が歩んできたストーリーと、これを裏付ける痕跡の類が、かなり整理されてきたといえる。だが、当初は解体前提で始まった緊急調査ゆえ¹⁾、さらなる詳細調査や地盤を含めた環境調査には至っておらず、引き続きの調査事業が必要である。年代特定についても、現在は放射性炭素年代測定等の現代科学的手法が利用可能であり、併用が望まれる。

それにしても、調査の過程において、勝画楼を保有していた鹽竈神社の寛容なるご判断と、これを願ひ出た市長以下行政担当者の方々のご苦勞、そして想いを伝え続けた市民や報道陣の努力によって、勝画楼が解体を免れることになったことは、誠に喜ばしい限りである。各位の勞に、心から敬意を表するとともに、今後が重要であることにも触れておきたい。

確かに、以前の解体保管計画の背景には、勝画楼という眺望絶景の地ゆえの、崖地という立地の特殊性があった。丘陵の直下には民家が建ち並んでいるから、地盤調査は不可欠である。また、広い一森山の管理を考えると、勝画楼はやや死角になりやすいという懸念があるが、だからこそ、かつての伽藍配置を偲び、遺構までの石段やアプローチ、常夜灯の台座²⁾、管理者が居住した家屋、豊かな木々といった構成要素の一切を、きちんと捉える環境調査が必要である。

そして何より大切なのは、保存の意義を国民・市民が享受する「活用」の計画であり、これを実現するための「設計」である。どんな来訪者が、どのように鑑賞するのか。そのために必要な付帯設備は何か。サインなどの必要な付帯設備が、本来の歴史的建造物の真正性（オーセンティシティ）を損ねることはないか。検討すべき点は無数にあり、これらの一切を統合的に解決する設計が必要である。そうしてはじめて、正しい歴史が後世に伝えられていくのである。

勝画楼は、その努力を投じるに相応しい歴史的建造物である。今後とも各位の連携共創を期待する。

(東北工業大学大学院教授 大沼正寛)

註1)：平成29年度に調査を開始した時点では、勝画楼を解体し、移築や部材保管等を行うことが検討されていた。

註2)：勝画楼敷地内、鹽竈市街を見渡せる位置に、六角形の石造り台座が残る。灯台跡、幕末に作られた砲台跡など諸説あったが、平成28年(2016)、東北大学災害科学国際研究所准教授の佐藤大介が、仙台市の大竹家に伝わる古文書の中から図面を発見し、この場所に高さ約12mの巨大常夜灯を建設する計画があったことが分かった。詳細は平成28年11月29日付けの河北新報朝刊記事を参照されたい。

勝画楼の文化財的価値について

旧法蓮寺勝画楼・広間は次の三つの視点からその文化財的価値を評価することができる。

1. 伊達文化を物語る歴史的価値

勝画楼は仙台藩第5代藩主・伊達吉村公が鹽竈神社参拝に際して使用された建物であり、その室内に公が命名・揮毫した扁額「勝画楼」を掲げていた。藩主参拝において、法蓮寺での食事や着装、謁見、沐浴、御休息などが一種の儀礼として定式化されており、往事の壮麗な藩主参拝の姿を物語る鹽竈神社の貴重な構成資産である。

仙台藩主の地方巡視や猟遊に際しては、宿泊するための御仮屋や休息所が各地に整備されており、たとえば松島の観瀾亭もその一例である。鹽竈来訪に際しても、法蓮寺での御休息ののち、御仮屋で宿泊するなど、町に藩主を迎えるための施設群が整備されていた。しかしながら現在の塩竈で、こうした藩主の行動を物語る施設は本建物のみとなっており、その希少性を高めている。

旧法蓮寺勝画楼・広間は、広域の領地を有して各地に藩主の休息・宿泊施設を整備させた大名である伊達家の文化を伝える希少な建物であり、高い歴史的価値を有する。

2. 武家の格式を誇る優れた建築的価値

上記の歴史的価値を踏まえれば、旧法蓮寺勝画楼・広間の建築的特徴も、寺社建築よりむしろ、武家建築としての文脈から評価できる。

具体的にはまず、勝画楼とかつての法蓮寺客殿ともに三つの部屋が欄間や襖を介した続き間として連なり、かつ入側をもつという、いわば武家住宅の御殿に類似する平面構成を有する点である。床の間に座す藩主への謁見に際し、その着座する位置は格式により規定されており、こうした身分の階層性ゆえに、武家住宅では続き間あるいは入側などの部屋の序列化がみられたのであった。また、勝画楼の大床の形式や意匠をこらした欄間や襖絵などの優れた室内も、藩主の格式を表現するためのものといえよう。これに加えて、こうした優れた室内意匠を備えた新旧の書院建築が、旧法蓮寺客殿および勝画楼と併存することも、本建物の大きな特徴である。

なお、武家の接客空間では、高い身分のものを迎える専用の式台玄関や、中門と庭を経た特別な座敷への導入経路などのアプローチが整えられることが多い。旧法蓮寺勝画楼・広間においては、江戸時代にどのような動線で藩主が行動したか、今後史料などから解明されれば、本建物の歴史的価値がより高まると考えられる。

3. 優れた眺望と景観的価値

勝画楼から望む景色は、谷文晁や菅井梅関などの絵師が画題として取り上げている。料亭となっ

た明治時代以降も、その優れた眺望を愛でる紀行文が記されている。崖上に迫り出す懸造り風の建築様式、あるいはパノラマ的な開口部に縁と欄干を備えたしつらえのため、優れた眺望を有する建物である。

これと同時に、崖上に迫り出す立地形式ゆえに、市街からもその茅葺屋根の優れた外観を望むことができる。風光明媚な塩釜湾と茅葺屋根の勝画楼を一体的風景として描かれることも多い。さらに、海を望む大常夜灯の台座、庭園工作物、樹木群も港町塩竈を特徴づける景観要素である。

眺望の視点場であり、かつ優れた景観要素という双方にわたり、本建物は高い景観的価値を有するものである。

(東北工業大学講師 中 村 琢 巳)